

巻頭言

四柳 宏*,**

かつて肝臓病は“21世紀の国民病”といわれていた。最大の問題であったのが1990年代には国内に200万人以上おられたウイルス性慢性肝疾患の患者であった。その後インターフェロン、核酸アナログ、直接作用型抗ウイルス薬(DAA)の登場により患者の数は大きく減り、肝細胞癌を合併する患者の数も大きく減った。新しい薬の登場、効果の高い薬の登場の素晴らしさを実感させられた。

肝臓病治療の目標は肝硬変・肝細胞癌になることを防ぐことにあるといっても過言ではないが、肝細胞癌を合併した後の治療も大きな変革を遂げた。2007年にソラフェニブが発売されて以来、分子標的療法は着実に変化を遂げた。ことに2017年以降の進歩は免疫チェックポイント阻害薬との併用の導入もあり著しいものがある。

21世紀の国民病として最大のものは、成人の20～30%が罹患する脂肪性肝疾患(MASLD)に移ってきた。生活習慣の改善以外に治療法がなかった時代が続いたが、肝臓選択的甲状腺ホルモン受容体 β 作用薬であるレスメチロムがStage 2～3のMASHを対象に米国食品医薬品局(FDA)で承認され、新たな治療薬の上市も予定されている。糖尿病・肥満に対する治療薬の肝臓への作用も目が離せない。

今回の特集は肝疾患に対する新しい治療薬が姿を見せ始めたタイミングに合わせ、満を持して企画させていただいた。読者の皆さんの日常診療、研鑽に役立つことを願っている。

Hiroshi Yotsuyanagi

*国立健康危機管理研究機構 **東京大学医科学研究所先端医療研究センター感染症分野
(〒108-8639 東京都港区白金台4-6-1)